

01-039

保育環境の木質化状況が0-1歳児の遊び行動に与える影響

浅田 茂裕、吉川 はる奈、七五三木 侑乃、
吉山 怜花

埼玉大学 教育学部

木材は、保温性、保湿性、弾力性、衝撃吸収性などに優れ、人の感性に深く関わる材料として伝統的に我が国の生活環境に用いられてきた。最近の研究によって、木材を多用した木質空間は人の心身の健康や子どもの育ち、学びなどに好ましい影響を与えることが明らかになりつつあり、木材利用への関心の高まりとともに、様々な検討が進められるようになってきた。筆者らは、木質化された室内が子どもの育ちや学びに対する効果を明らかにするために、木質化された空間における幼児、児童の行動特性に着目して検討をすすめてきた。本報告では、0-1歳児を対象として、その生活圏で最も接触機会の多い床材種と行動特性の関係について検討を試みた。実験は、埼玉県産のスギを使用した床材（スギ床材）と表面にMDFにオレフィン紙が貼付された床材（シートフロア）の2種を用い、それぞれ2.5m×2.5mの木質床を隣接するように設置した。それぞれの床材上には4種の玩具を同数配置し、子どもに自由にふれられるようにした。被験者は、A園に在籍する0歳児（月齢8月以上12月未満）と1歳児（13月以上24月未満）であり、それぞれを2群に分け、保育士を同席させて実験フィールド内に導入した。実験中の行動は、幼児、保育士ともにとくに行動の制限を設けておらず、自由な行動を観察、映像記録した。分析にあたっては、幼児の【手指の動作】【姿勢】【保育士との位置】【他者との接触】などを予備観察をもとにコーディングし、行動分析ソフトウェアによって映像の分析を行った。実験の結果、【手指の動作】では、2つの床材での幼児の動作に大きな差は見られないものの、スギ床材の場合では、より能動的に遊ぶ傾向が見られた。【姿勢】については、いずれの条件でも座位が最も大きく、スギ床材、シートフロアでの大きな差は見られなかったが、スギ床材では、姿勢変更がやや活発に行われていた。【保育士の位置】では、シートフロアでは幼児は保育士と対面位置となる時間が多く、保育士の存在を確認できる位置、姿勢をとっていることがわかった。スギ床材の場合、対面だけでなく、横向き位置となっている時間が長いことがわかった。【他者との接触】では、スギ床材では保育士から幼児に触れる頻度が高く、幼児は自立して遊ぶ時間が長い一方、シートフロアでは幼児から保育士に対して触れる、関わる頻度が高いことがわかった。

01-040

小児科病棟における母乳育児支援に対する実態調査

芝崎 麻美、田子 亜希子

千葉市立海浜病院 看護部 小児科病棟

【1】はじめに

WHO/UNICEFの乳幼児の栄養に関する世界的戦略では、母乳育児は2年かそれ以上続けるといわれている。しかし、厚生労働省の平成17年度乳幼児栄養調査によると96%の母親は母乳で育てたいと思っているが実際生後6ヶ月時の母乳栄養の割合は34.7%である。A病院小児科の乳幼児の入院は70%を超え、母乳育児支援を必要としている症例も多くなってきている。そのため、小児科で勤務する看護師の母乳育児に関する認識や支援について明らかにし、今後の母乳育児支援を実施していく資料の一助とすることを目的とする。

【2】研究方法

A病院小児科病棟看護師22名を4～5名のグループにランダム形成し、グループインタビューを行った。属性を把握するため、看護師経験年数と母乳についての学習機会の有無を調査した。母乳育児支援の実態、母乳育児支援の認識について調査した。尚、グループインタビューでは印象に残っている内容について想起した発言を支援の実態とした。ICレコーダーで録音された記録から逐語録を作成し、その中で母乳育児支援と思われる内容を整理し、集計した。倫理的配慮として文章、口頭で説明し同意を得た。

【3】結果

1. 看護師経験年数は1～4年の看護師が約半数を占めていた。2. 約7割の看護師は何らかの形で母乳について学習機会をもっていたが、専門的な知識を得ている看護師はその内の2割だった。3. 専門的な知識がない看護師は他の看護師に相談して解決したり直接の支援に至らなかったりした。一方、専門的な知識を得ている看護師は自ら支援を行っていた。4. 母乳育児支援への認識として「病棟全体で支援を統一することへの期待」「看護師が積極的に行う役割とは捉えられていない現状」「母乳育児支援の経験がないため他の看護師に頼りたいという思い」「専門的な知識や技能を提供したいという意欲」「今まで着目してこなかったことへの気づき」「母親のライフスタイルによるため、看護師が介入することの疑問」「これまでの母乳育児が継続できるようサポートすること」「3～4歳の子がおっぱいに執着することへの疑問」の8つのカテゴリーが抽出された。4) 考察母乳育児支援に関する認識にはばらつきがあり、専門的な知識の有無が支援のきっかけや内容に影響することがわかった。母乳育児を支援することは小児に携わる医療者として当たり前になるのが理想といわれており、小児科領域においても支援を行っていくことが重要である。